原著論文

ジョージ・ギッシングの アメリカ滞在中の短編小説

── 無記名作品を中心に ──

八 幡 雅 彦

George Gissing's Short Stories from the United States: Emphasis on the Unsigned Stories

MASAHIKO YAHATA

While staying in the United States, George Gissing kept writing short stories anonymously. The exploration of his American stories began in the 1910s and 22 stories, of which 11 are signed and the other 11 are unsigned, have been discovered until 1990. But it is doubtful whether all of them were written by Gissing. This paper tried to reveal which were actually written by him and which were not by surveying materials which suggested his biographical facts, tracing the history of the exploration of his American stories and examining each story with emphasis on the unsigned stories.

The above research came to the following conclusion: 15 of them were certainly written by Gissing. "R. I. P" and "The Warden's Daughter" were probably written by him."Twenty pounds" and"Joseph Yates' Temptation"might have been written by another author. "The Death Clock","The Serpent-Charm" and "Dead and Alive", which are called the Browne-Vargrave trilogy, were almost certainly written by another author.

はじめに

ジョージ・ギッシングは，1877年，アメリカ滞在中，ペンネームあるいは無記名で短編小説を書き続けていた。彼のアメリカ時代の作品の発掘は1910年代頃から始まり，1990年現在で22編が発見されている。内訳は，ペンネームで書かれたもの，無記名で書かれたもの，それぞれ11編ずつであるが，中には，実際にギッシングによって書かれたのかどうか疑問を感ずるものもある。「G. R. G」あるいは「G. R. Gresham」というペンネームで書かれた作品は明かにギッシングのものであるが，本論文では，それ以外のペンネームで書かれた3作品と11編の無記名作品が実際彼によって書かれたのかどうかを考証し，彼によって書かれたと断定できる作品，断定はできないが彼によって書かれた可能性の高い作品，彼以外の作家によって書かれた可能性も考えられる作品，彼以外の作家によって書かれた可能性の高い作品の4つに分類する予定である。

ジョージ・ギッシングのアメリカ放浪

オウエンズ・カレッジ (Owens College)，現在のマンチェスター大学 (Victoria University of Manchester)，の優等生であったジョージ・ギッシングは，娼婦マリアン・ヘレン・ハリソン (Marianne Helen Harrison) と恋に陥り，彼女に金を貢ぐため，大学のロッカー・ルームで度重なる窃盗を働いた。1876年5月31日，現行犯で逮捕された彼は，その一週間後に大学を退学処

分となり，1カ月の懲役刑を終えた後，知人たちからわずかばかりの資金援助を受け，新生活を始めるためアメリカへ渡った。

ボストンに着いた彼は，新聞や雑誌に投稿して生活費を稼ぎ，そこでの生活の充実ぶりを，1876年11月13日に弟アルジャノン (Algernon) に当てた手紙のうちで述べている。中でも，「ここには立派な公共図書館がある。誰でも自由に使えて本当に多くの人々から利用されている。というのも，何しろ，ここでは誰もが本を読むから。読みたいと思う本で，この図書館にない本はほとんどない。まったくボストンは素晴らしい所だ。もしここを永久に離れることになるとすれば，私は非常に悲しむだろう」[1]という1節は，学究の徒ギッシングの生活の充実ぶりを如実に物語っている。しかし，その後，彼は，それ以上の生活費を稼ぐ必要性に迫られたのか，ボストンから約10マイル離れたウォルサム (Waltham) という小さな町に移り住み，そこの高校で，ドイツ語，フランス語，英語を教えるようになる。そして，1877年1月28日付けのアルジャノン宛の手紙の中で，この町では高校教師がいかに重要な人物であるかということを，新聞記者から取材を受けたことを引合いに出し述べている[2]。にもかかわらず，それから間もなくして彼は教師を辞め，シカゴへ向かうが，その理由は定かでない。

ギッシングのシカゴでの生活ぶり，そしてアメリカを去って10月3日にイギリスのリヴァプールへ帰り着くまでの経緯に関しては，事実を記すものがまったく発見されておらず，彼の代表作 *New Grub Street* (1891) と，モーリィ・ロバーツ (Morley Roberts) の小説で，ギッシングをモデルにした *The Private Life of Henry Maitland* (1923) の記述に頼るしかない。本来，*New Grub Street* は，真の芸術を追求するあまりに，作品がまったく売れず，失意のうちに死亡するエドウィン・レアードン (Edwin Reardon) と，読者の趣味に完全に迎合し，大衆作家として成功するジャスパー・ミルベイン (Jasper Milvain) の対照的生き方がメイン・テーマであるが，マイナーな登場人物のうちのひとり，ウェルプデール (Welpdale) のアメリカ放浪に関する記述は，ギッシングのアメリカ放浪の様子を教えてくれる。またロバーツの描くヘンリー・メイトランドの私生活はギッシングの伝記そのものであり，この2作を総合すると，彼のシカゴでの生活ぶり及びイギリスに帰り着くまでの経緯は次の通りである。

1877年の3月上旬頃，ウォルサムを去ったギッシングは，ニューヨークまで行き，一時はそこからイギリスへ帰ろうかと考えるが，西部へ行けば運が開けるだろうと思い直して，寒くて眠れぬ列車の長旅の末，シカゴに到着する。彼の所持金は5ドルにも満たなかったが，彼は勇気を奮い起こして，4ドル50セントを1週間の宿代のために支払う。ウォーバッシュ街 (Wabash Avenue) にあるこの不潔な安宿の住人たちは主に俳優であり，個室には暖炉さえなかった。生活費を稼ぐ必要性に迫られた彼は，シカゴの大手新聞である *Chicago Tribune* を訪れ，玄関の前を何時間も右往左往した挙げ句，エレベーターに飛び乗り，編集者に会いに行く。サミュエル・ジョン・メディル (Samuel John Medill) という人物であると思われる[3]この編集者に，ギッシングは仕事を与えて欲しいと頼むと，ジャーナリズムの経験を問われたので，まったくないと答えた。そこで，メディルが彼に，「君は何ができると思っているのだね」と尋ねると，ギッシングは，「あなたの新聞のために小説を書いてさしあげたい」と答えた。これに対し，メディルは，もしそれが良い作品であれば掲載しようと申し出た。新聞社を出たギッシングは，ミシガン湖へ行き，凍てつく風に打たれながら湖岸を30分程歩いて，小説の構想を練った。そして，なけなしの金でペンとインクと紙を買って下宿に帰り，執筆に取り組んだ。周囲のうるさい環境にもかかわらず，彼は2日間で作品を仕上げ，編集者の元へ持参した。幸運にも，この作品，"The Sins of the Fathers"は受け入れられ，1877年3月10日の *Chicago Tribune* に掲載され，ギッシングは原稿料18ドルを受け取った[4]。

その後，彼は，この新聞や他のいくつかのシ

カゴの新聞に約20の短編小説を発表するが，やがてネタが尽き，ホームシックにかかり，イギリスへの帰国を望むようになる。約4か月住んだシカゴを去り，ニューヨークへやって来た彼は，帰国費用を稼ぐために他の作品を書きたいと思っていたところ，偶然，前述の"The Sins of the Fathers"がトロイ（Troy）という町の新聞に転載されているのを発見した。そこで彼は，この新聞の編集者は彼の書くものに興味があって，彼に仕事を与えてくれるかもしれないと期待して，蒸気船に乗ってハドソン川を上り，トロイに上陸する。しかし，ギッシングの期待は見事に裏切られ，この編集者にはまったく相手にしてもらえず，所持金が1ドルにも満たない彼は，数日間，ピーナッツだけの食事で飢えをしのいだ。そしてある日，仕事を求めて法律事務所を訪れたところ，留守番の男性から，助手を募集している写真屋を紹介され，彼の元で働くようになる。ギッシングは彼と共に旅回りのセールスをしたが，ほとんど注文を取ることができず，ボストンに着いた時，彼と別れることを決意する。

この間，ギッシングは，相手は定かでないが，イギリスのある人物の元へ帰国費用の貸付を依頼する手紙を書いており，この写真屋と別れた翌日に彼はその金を受け取った。そして，10月3日，彼はリヴァプールへ帰着している。

ギッシングのアメリカ滞在中の短編小説発見の歴史

ギッシングのアメリカ滞在中の短編小説の発掘は，1910年代頃から，*The Private Life of Henry Maitland* の著者，モーリイ・ロバーツと文通を続けていたアメリカ人ジャーナリストのヴィンセント・スターレット（Vincent Starrett）とクリストファー・ハーグラップ（Christopher Hagerup），さらにはアーカンサス大学（University of Arkansas）のジョージ・エヴァレット・ヘイスティングス（George Everett Hastings），ニューヨーク市立ハンター大学（Hunter College of the City of New York）のトーマス・オリーブ・マボット（Thomas Ollive Mabbott）らによって始められた。

ロバーツは，彼の作品のうちで，「もしメイトランドのアメリカ人研究者が，1878年から1879年の *Tribune* の綴じ込みをめぐって彼が書いた作品を発見したとしたら，非常に面白いことだと私は思う。」[(5)]と述べている。「1878年から1879年」とうのは間違いで，正しくは「1877年」だが，この記述と，*New Grub Street* の中のウェルプデールのアメリカ放浪談を手がかりに，ハーグラップとヘイスティングスがそれぞれ独自に調査したところ，次の4作が両者によって発見された。

"The Sins of the Fathers"（*Chicago Tribune*，1877年3月10日）

"R. I. P"（同，1877年3月31日）

"Too Dearly Bought"（同，1877年4月14日）

"Gretchen"（同，1877年5月12日）

New Grub Street の中に，ウェルプデールがシカゴの新聞のために書いた作品がトロイの新聞に転載されていたという記述があり，"The Sins of the Fathers"がそれに該当することが明かになった。この作品は，1877年7月14日の *Troy Times* に，"The Sins of the Father"と微妙にタイトルを変えて掲載されていたのである。どちらも筆者名が記されていなかったが，後述するように，作品内容からしてもギッシングによるものと断定できよう。

"R. I. P"もまた無記名作品で，現在，絶版で入手不可能のため，作品内容が分からないが，ハーグラップ以外の学者たちもギッシングの作品であると認めているので，彼によって書かれた可能性は高い。

"Too Dearly Bought"と"Gretchen"に関しては，「G. R. G.」という，ギッシングがアメリカ滞在中に用いていたペンネームのうちのひとつで書かれており，彼の作品であることはすぐに判明した。これは，ギッシング（George Robert Gissing）のイニシャルである。

ヘイスティングスは，この4作の他にも，G. R. G.のペンネームで書かれた"Brownie"（*Chicago Tribune*，1877年7月29日）という作品も

発見した。さらに彼は，「Felix Browne」という筆者名で書かれた“The Death-Clock”(*Chicago Tribune*, 1877年4月21日)，「Dr. Vargrave」というペンネームで書かれた“The Serpent-Charm”(同，4月28日)と“Dead and Alive”(同，7月14日)をもギッシングの作品だと主張している。しかし，Browne-Vargrave 3部作と呼ばれているこの3作については，実際彼によって書かれたのかどうか非常に大きな疑問を感じる。このことに関しては，後に詳しく論ずることにする。

New Grub Street の中で，ウェルプデールは，「私は，その新聞や他の新聞に書いて，何か月間かシカゴで自活していた」[6]と述べており，これを手がかりに，トーマス・オリーブ・マボットは，*Chicago Tribune* 以外の新聞の探索を行った。彼が目を通したのは，*Chicago Evening Journal*, *Times*, *Inter-Ocean*, *Chicago Post* という当時の四つの大手新聞で，*Chicago Evening Journal* に掲載された“The Warden's Daughter”(1877年4月28日)と“Twenty Pounds”(同年5月19日)，*Chicago Post* に掲載された“Joseph Yates' Temptation”(同年6月2日)という，いずれも無記名の作品をギッシングの作品であると断定した。その主な根拠は，ギッシングの作品だと想像できるものが他に見あたらなかったということである。確かに“The Warden's Daughter”に関しては彼の作品である可能性が高いが，残りの2作に関しては彼以外の作家によって書かれた可能性もある。このことについても後に論ずる予定である。

また，ギッシングと彼の家族との間でやりとりされた手紙を集めた書簡集が1927年に発行されることにより，彼のアメリカ滞在中のもうひとつの作品の存在が明かになった。彼はイギリスに戻ってから，1880年2月7日，弟のアルジャノンに当てた手紙の中で「私は，*Appleton's Journal* という非常にすぐれた月刊誌に約6ページの小文を書き，45ドル，つまり9ポンドを受け取った」[7]と述べており，この作品は，「G. R. Gresham」というペンネームで書かれた“An English Coast-Picture”(*Appletons' Journal*, 1877年7月号)であることが後に判明した。

さらに1930年代に入って，カリフォルニア州サンタ・バーバラの書物蒐集家M. C. リックター(M. C. Richter)が，ギッシングの息子アルフレッド(Alfred)から，同じくG. R. Greshamのペンネームで書かれた“A Terrible Mistake”(*The National Weekly*, 1877年5月5日)と“The Artist's Child”(*The Alliance*, 同年6月30日)というギッシングの2作品を買い取ったことを明らかにした[8]。

以後，50年近くギッシングのアメリカ時代の作品が新たに発見されることはなかったが，1980年代に入って，パーデュー大学(Purdue University)のロバート・L・セリグ(Robert. L. Selig)の精力的探索によって次々と記名作品，無記名作品が新たに発見された。彼は，ギッシングの覚え書きを集めた *Commonplace Book* (1962)に出てくる，「私は，織物屋の経営と週間新聞の編集を同時にやっているある男のためにいくつかの物語を書いた」[9]という一節に着目し，シカゴのニューベリー図書館(Newberry Library)で探索を行ったところ，G. R. Greshamのペンネームで書かれた作品をふたつ発見した。この「週間新聞」というのは *The Alliance* のことで，ひとつは，“A Mother's Hope”(1877年5月12日)であり，もうひとつは，“A Test of Honor”(同年6月2日)だった[10]。その後，セリグは6編の無記名作品も発見しており，それらを発表した順序は次の通りである。

1983年…“Too Wretched to Live”(*Chicago Daily News*, 1877年4月24日)

1986年…“One Farthing Damages”(*Chicago Post*, 同年7月28日)

1990年…“The Portait”(*Chicago Daily News*, 同年6月18日)

“The Mysterious Portrait”(*Chicago Daily News*, 同年7月6日)

“The Picture”(*Chicago Daily News*, 同年8月4日)

1991年…“How They Cooked Me”(*Chicago Daily News*, 同年6月4日)

これら6作に関しては，ギッシングの作品であ

ると断定できる根拠が十分に揃っており，そのこともこの後で，セリグの根拠も踏まえて論じてみたい。

"The Sins of the Fathers"と"Too Wretched to Live"

ギッシングのアメリカ時代の処女作"The Sins of the Fathers"は，イングランドの北部都市での，裕福な工場主の息子レオナルド・ヴィンセント (Leonard Vincent) と貧しい娘ローラ (Laura) との出会から始まる。ギッシング自身が，マンチェスターの街角で娼婦マリアン・ヘレン・ハリソンに出会って，哀れみの情を抱いて恋に陥ったように，レオナルドもローラを哀れみ恋する。彼は彼女を彼の父親の元に預け，ギッシングと同様にアメリカへ渡り，教師となる。ローラを快く思わない父は，彼女が死んだという偽りの知らせをレオナルドの元へ送る。さらに父は，ローラにも，レオナルドはもはや彼女を愛していないという偽りの手紙を受け取らせ，ふたりの仲を引き裂いてしまう。レオナルドは，今度は父親の承諾を得て，アメリカ人女性と結婚する。ある日，彼は妻と劇場に行った時，ローラが合唱団の一員として舞台で歌っているのに偶然出くわす。そこで，彼は，妻を先に帰宅させ，劇場の外でローラと話す。彼が，自分はもう結婚していて，もはや彼女を愛することはできないと告げると，彼女は絶望し，彼に1時間だけ一緒にいて欲しいと頼む。そして彼女は，彼を吹雪の吹きすさぶ川辺へ連れて行き，彼の体へ腕を回して，彼を道連れにして川へ飛び込み，ふたりは溺死する。父親の罪の報いを子供たちが受けねばならなかったという結論でこの物語は終わる。

前述したような外的証拠からも，そしてまたギッシングの自伝的要素を含む作品内容からしても，この無記名作品は彼によって書かれたものと断定しても間違いないだろう。

この作品に描かれている溺死という事件，事故はギッシングの後の数多くの作品にも登場してくる。例えば，アメリカ時代の作品だと，次に論じる無記名作品"Too Wreched to Live"，記名作品である"Brownie"，イギリスへ帰ってからの作品だと，処女長編小説 *Workers in the Dawn*(1880)，さらには彼の死後出版された中編小説"Cain and Abel" (1970)，"All for Love" (1970) 等に登場してくる。ロバート・L・セリグが主張するように，この溺死が描かれていることが"Too Wretched to Live"がギッシングによって書かれたことの根拠の一つになるだろう[11]。貴族の家庭に生まれたアーサー・メルヴィル (Arthur Melville) は，6週間の休暇をフレイジャー (Frasier) 家の農場で過ごし，そこの娘リリアン (Lilian) と恋をし，結婚の約束をする。しかし，アーサーは，ジェシー・アール (Jessie Earle) という別の美人の女性と知り合い，リリアンとの婚約を破棄し，ジェシーと婚約する。アーサーから婚約破棄の意志を告げる手紙を受け取ったリリアンは，絶望し，彼女はどれほど彼を愛していたかを，そして彼女は湖に身を投げて自殺するつもりであることを返事の手紙で伝える。そして，リリアンの祖父を通じてアーサーがこの手紙を受け取った時にはすでに彼女は死んでいることが暗示されている。これを読んだアーサーは，彼が本当に愛していたのは彼女だったことに気づくが，時すでに遅く，ジェシーと結婚しても決して幸福にはなれない。

主人公の男性が，ある女性との恋を放棄し，別の女性を愛するようになるというケースは，彼の他の作品，例えば，"The Sins of the Fathers"，*A Life's Morning* (1888) 等にも描かれている。この作品がギッシングのものであるというもうひとつの根拠は，彼の他の作品に登場してくる人物の名前が，この作品にも用いられているということである。ギッシングには，同一のファーストネーム，あるいはラストネームを幾つかの作品で重複して用いるという癖があった[12]。この作品に関して言えば，アーサー・メルヴィルと *Workers in the Dawn* の主人公アーサー・ゴールディング (Arthur Golding)，リリアン・フレイジャーと *Denzil Quarrier* (1892) のリリアン(Lilian)，ジェシー・アールと *A Life's Morning* のジェシー・カートライト (Jessie Car-

tight) が同一のファーストネームである。

以上のような根拠が揃えば，この作品をギッシングのものと断定することができるだろう。

Chicago Daily News の4作品

"Too Wretched to Live"に触れたついでに，*Chicago Daily News* に掲載された4つの無記名作品について掲載順に論じてみたい。

"How They Cooked Me"はアーネスト・モーランド (Ernest Morland) が，いとこのアニー・ヒルトン (Annie Hilton) の策略にひっかかり彼女と結婚するはめになるという物語である。30歳を過ぎても独身のアーネストは，妹のミニー (Minnie) から結婚をせかされている。ある日，ギッシングの出生地でもあるウェイクフィールド (Wakefield) に住むいとこのアニーが，連れの女性を伴ってロンドンの彼らの家を訪れたいという手紙を寄こしてきた。それから1週間以内にふたりはやって来たが，初めて会ういとこは，ファッションのセンスも悪く，そわそわしているうえに気難しく，女性としての美しさや優しさはひとかけらもなかった。一方，彼女の連れのアニー・ワトソン (Annie Watson) は，優美で，控え目で，声は美しく，ダンスを優雅に踊り，フランス語，イタリア語が堪能で，絵が上手だった。彼女に惚れたアーネストは，結婚を申し込んで，承諾を得る。ところが，実は，彼女は，連れの女性に変装したいとこのアニー・ヒルトンだったのである。

この作品がギッシングのものと断定できる根拠は，まず彼の出生地であるウェイクフィールドの名が登場してくること，そしてロバート・L・セリグも指摘するように"The Sins of the Fathers"の登場人物のひとりであるミニーの名前がこの作品でも用いられていることである[13]。もうひとつの根拠としては，ギッシング独特の修飾語の重複が見られることだ。アーネストが，連れの女性に変装したいとこの醜さを述べる次のパラグラフに，それが典型的に見られる。

Imagine, then, a prim spinster, rapidly approaching 40, attired after the fashion of middle-aged ladies in general, fidgety, critical, and peevish, without a single particle of feminine beauty or tenderness, a tall, wiry-looking personage, devoid of everything save English grammar and regular habits, and you will have an idea of the charming belle of a cousin, whom I had expected to admire ![14]

さらに，この作品がギッシングのものであることを裏付ける根拠として，いとこのアニーが絵が得意であることと遺産相続人であることが挙げられる。画家，遺産相続人は，これから論じる"The Portrait"や"The Mysterious Portrait"を初めとするギッシングの数多くの作品に登場してくる。

"The Portrait"のあらすじは，次の通りである。ロバート・サウジー (Robert Southy) は，ハリー・バートレット (Harry Bartlet) の家に飾られた1枚の女性の肖像画に魅せられた。ハリーの娘であるユージニー (Eugenie) によると，それは彼女のいとこのアニー (Annie) で，彼女の父親が家財すべてをハリー親子に譲るという遺書を残して死んだために，今では，貧しい家で母親とふたりで暮らしているという。ロバートは，帰宅中，偶然，肖像画の女性を見かけた。彼女は，暴漢に襲われそうになっており，ロバートに助けを求めてきた。彼は，その暴漢を追い払い彼女を家まで送ってやった。家に着くと，病弱な母親が出迎え，父親の新たな遺書を発見したという。前の遺書は，父の兄に当たるハリーに強制的に書かされたものであるということが判明した。そこで，法律家であるロバートは，母と娘のために遺産相続の手はずを整えてやり，ふたりは財産を取り戻した。そして，アニーはロバートと結婚し，幸福をつかんだ。一方，ハリーは打ちのめされ，カリフォルニアへ渡って死亡，娘のユージニーはろくに仕事ができず，結婚の望みも断たれた。

この作品がギッシングのものであることを裏付ける第1の根拠は，彼の作品に頻繁に登場し

てくる遺産相続が中心テーマになっていることである。第2の根拠は，女性像の描き方にある。*Workers in the Dawn* や *The Unclassed* (1884) 等でも明かであるように，彼は，初期の作品では，女性を完全に善と悪に描き分ける癖があった。この作品ではアニーが善であり，ユージニーが悪である。その他の根拠として，*The Unclassed* 同様，暴漢に襲われる女性を男性が救うという出来事が描かれていること，"How They Cooked Me"同様，アニーという人物が登場してくることが挙げられる。

遺産相続が大きなテーマになっているという点では，次の"The Mysterious Portrait"もそうである。大富豪の準男爵フィリップ・マーストン (Philip Marston) の息子のハリー (Harry) は，ローマで絵画の研究をしている時，家政婦ヘレン・トレイシー (Helen Tracy) と恋に陥り，イギリスへ帰って彼女と結婚する。しかし，ハリーが貴族の娘と結婚することを望んでいた父のフィリップは，彼を勘当した。そのため，彼は裏通りのみすぼらしい家で結婚生活を送ることになった。ある日，画家である彼のもとへとひとりの老紳士がやって来て，自分の描写に従って，死んだ娘の肖像画を描いて欲しいと依頼した。ハリーは描き続けているうちに，それが妻のヘレンの顔にそっくりになるのに気がついた。老人の話によると，彼の娘は彼の希望に背いて貧しい陸軍将校と結婚したために，彼は彼女を勘当し，彼女は女の子を生で死んだという。そして，その女の子というのがヘレンだったのである。由緒ある広大な敷地の所有者であるこの老人は，娘を虐げた罪を償うために，孫娘のヘレンに彼の土地を遺産相続させることにした。これを知ったハリーの父は，ふたりの結婚を認め，彼の邸宅へ住まわせ，ハリーの描いた肖像画を飾った。

この作品がギッシングのものであることを裏付けるもうひとつの大きな根拠は，ヘレンという名を持つ娘の登場である。ギッシングは，同じ名前を持つマンチェスターの娼婦と恋をし，それがきっかけで窃盗を働き，逮捕投獄され，その後，新生活を始めるためにアメリカに渡った。愛するヘレンをイギリスに残し，自責の念にかられた彼が，哀れな境遇に生まれ育ち，最後には幸福をつかむという形で同名の女性を作品の中に登場させたとしても，なんら不思議はない。

最後の"The Picture"には，ギッシングの初期作品の特徴である極度に美化，神聖化された女性像が描かれており，これが，この作品がギッシングのものであることを裏付けるひとつの根拠となっている。画家ラルフ・バートラム (Ralph Bertram) は，黄昏時，川辺にいるふたりの女性をスケッチした。そのうちの若い方の美しさに魅了された彼は，翌朝，再び同じ場所に行ったが，ふたりには会えなかった。彼はそのスケッチを完成させ，彼のアトリエに展示したところ，賞賛を浴び，まもなくして著名な画廊に飾られることになった。そして，この絵は大評判となり，数多くの人々を引き付けた。寒さが厳しく，風の強いある日の夜，バートラムは，若い娘が，倒れそうになっている彼女の母親を助け起こそうとしているのを見て，手を貸し，ふたりを彼の家へ避難させた。そこで，彼は，ふたりが彼の絵の中の女性であることに気づいた。この母と娘はフランス人で，父の死後，イギリスへやって来て，苦難と孤独を味わってきたらしい。彼は，彼の絵が飾られてある画廊へ娘を案内した時，人々の賞賛と羨望の的になった。そしてふたりは結婚した。

"The Portrait", "The Mysterious Portrait", "The Picture"の3作に共通のテーマは「絵画」であり，すべてがハッピー・エンドを迎えていることから，そしてまた同一の新聞に掲載されていることから，同一の作者によって書かれたと考えて差し支えはないだろう。ギッシングの絵画に対する興味は，ボストンにいた頃，*Commonwealth* という新聞に"Art Notes"と題するエッセイを書いていたこと[15]や，彼のいくつかの作品に絵画や画家が登場することによって示されている。さらに，彼の死後出版された短編小説 *An Heiress on Condition* (1923) には画家が登場し，遺産相続がからみ，ハッピー・エンドを迎えるという点で，この3作とか

なり類似が見られる。

"One Farthing Damages"

ギッシングが書いたと言われている無記名作品のうちで，彼のものと断定できるもうひとつの作品は，"One Farthing Damages"である。ロバート・L・セリグが指摘するように，ギッシングの他の作品の登場人物の名前がいくつかこの作品の中に用いられていることがその大きな根拠である[16]。ヒロインのメアリー・ホープ(Mary Hope)の姓は，*The Nether World* (1889)にホープ一家として登場してくる。彼女の下宿の女主人マーガトロイド (Mrs. Murgatroyd) も，*Denzil Quarrier* (1892) の中で，歯科医マーガトロイドとして登場してくるし，悪漢サミュエル・スライソープのファースト・ネームは，*In the Year of Jubilee* (1894) のサミュエル・バーンビイ (Samuel Barmby) の中に現れる。作品のあらすじは次の通りである。

バーナード・ホープ (Bernard Hope) は，娘メアリーへの遺産の管理を，友人で娘の婚約者であるジェフリー・ハワード (Geoffrey Howard) と弁護士のサミュエル・スライソープに委託して，この世を去った。しかし，軍人であるハワードはインドで戦死したと報じられ，スライソープひとりが遺産を管理することになった。彼は，メアリーと結婚したがって，彼女の拒絶も無視してひつこく迫り，彼女を僻易させた。ある日，彼はメアリーに，彼女の相続額を増やすことを意図してある会社に投資したところが，その会社が倒産し，全額失ったと伝えに来た。メアリーは悲嘆に暮れ，ハワードの肖像画を眺めていると，死んだはずの彼が，突然，彼女のところに戻って来た。彼は，戦争で重傷を負い，捕虜の身となったが，命からがらイギリスへ逃げ帰って来たという。メアリーが父の遺産を失った話を聞いた彼は，調査に乗り出し，倒産した会社の清算事業所を訪れたが，そのような金は投資されてないとの返答を得た。そこで彼は，スライソープにじかに真相を問い正しに行った。スライソープによれば，メアリーの金は実は名前が良く似た別の会社に投資し，今や2倍の金額になっているという。彼女にうそをついて，彼女を悲嘆に暮れさせ，その後で彼女を助けてやることにより，彼女の愛を勝ち得ようと企んだらしい。これを聞いたハワードは，スライソープを殴り倒し，2週間後にメアリーと結婚した。スライソープは傷害罪でハワードを裁判に訴えたが，裁判長は，ふたりの罪を比較検討した結果，ハワードにわずか1ファージングの罰金を科し，彼に，それ以上小さな硬貨が存在しないのが残念だと告げた。

この作品がギッシングのものであることを裏付ける他の根拠として，遺産相続を中心に物語が展開することがまず挙げられる。また，メアリー・ホープは，ギッシングの作品に数多く登場してくる，優美で，可憐な娘たち，例えば，前述の *An Heiress on Condition* のアダ・ウルスタンホルム(Ada Wolstenholme)，*Thyrza* (1887)のヒロイン，サーザ・トレント (ThyrzaTrent)，*A Life's Morning* (1888) のエミリー・フッド(Emily Food) などを思い起こさせる。

マボットの発見した3作品

次に，ギッシングの作品だと断定はできないが，彼によって書かれた可能性が高いものに，トーマス・オリーブ・マボットによって発見された"The Warden's Daughter"がある。

刑務所の看守の娘で，足の不自由な少女マリオン・ハイド (Marion Hyde) は，囚人のひとりであるアイマー・プレストン (Aymer Preston) に引かれていた。なぜなら，彼は，彼女の行方不明の兄に良く似ていたからである。無実を主張するアイマーは，ハンストを行って栄養失調に陥り，ついに死亡したと医者からは診断された。ところが，その3日後，死んだはずの彼が，マリオンの部屋に現れ，無実を訴えた。彼女は，彼を哀れんで，兄の衣服と食糧を与えて，彼を逃がしてやった。それから何年かの月日がたち，マリオンの父も兄も今やこの世を去り，病弱で，天涯孤独の彼女は，刺繍の仕事をしながら，細々と生計を立てていた。ある日，仕事に行った家

で,彼女はアイマーそっくりの女性に出会った。マリオンが彼のことを話すと，その女性はアイマー当人を連れて来た。彼は，今では無実を晴らし，母の親戚の遺産を相続し，妹と一緒に暮らしていたのである。刑務所を出て以来，1日たりともマリオンのことを忘れなかったという彼は，彼女と結婚し，ハッピー・エンドとなる。

マボットがこの作品がギッシングのものであると主張する最大の根拠は，彼が探索した新聞のうちには，この作品と"Twenty Pounds"と"Joseph Yates' Temptation"以外にギッシングの作品と想像できるものがなかった[17]ということだが，それだけでこの3作がギッシングのものと断定するのは危険である。ただ，この作品に関しては，彼によって書かれたという可能性が他の2作よりも高い。その最大の根拠は，後にロバート・L・セリグによって発見されたのだが，この作品が"The Warder's Daughter"とタイトルを変えて，1877年5月18日付けの *Chicago Daily News* に掲載されたことである[18]。この新聞には，ギッシングの無記名作品が他に5作掲載されており，編集者が彼の作品を好んでいたと考えられる。もうひとつの根拠は，アイマーに類似した名前が彼の他の作品に登場することである。それは，ギッシングの死後出版された短編小説集 *The House of Cobwebs* (1906) のうちのひとつ"A Charming Family"に出てくるライマー (Rymer) 一家である。さらには遺産相続が描かれていること，ギッシングが生活を経験した刑務所が舞台となっていること等も根拠として挙げられる。

"Twenty Pounds"は，スティニング(Staining)という人物が持っていた20ポンドにまつわる物語である。彼とスミス (Smith) は，友人がブラジルに実際に行ったのかどうかで賭をし，行かなかった方に賭けたスミスが勝ち，20ポンドを得た。その直後にスミスは知り合いの牧師に会った。牧師によれば，早まった結婚をした若い男が親戚，友人から見捨てられ，妻子が病気になったために盗みを働き捕えられたが，20ポンドを弁償すれば帳消しになるという。そこでスミスは，スティニングから得たばかりの20ポンドを牧師に渡した。この出来事があった後，スミス自身が仕事でブラジルへ行くことになり，そこで20年を過ごした。ブラジルにいる間に，スティニングが身を持ち崩したという噂を聞いていた彼は，イギリスに帰ってスティニングを捜し出し，話を聞いた。彼によると，競馬に負けて一文無しになり，会社の金20ポンドを横領し，それが発覚して解雇され，裁判に訴えられる手前だという。そこで，スミスは，彼のためにその20ポンドを弁償してやろうと決意し，彼の勤める会社に出向くが，ふたりの経営者のうちひとりはどうしてもスティニングを許さないという。スミスは，その経営者の顔を見た時，20年前に盗みを働いて，自分が牧師を通じて20ポンドを弁償してやったために助かったあの男だということに気づいた。彼に，スミスがそのことを婉曲に物語り，あの20ポンドはもともとスティニングのものだったことを明かすと，彼は，スティニングの解雇取り消しと弁償金の免除を申し出た。スミスがこの嬉しい知らせをスティニングに告げに行った時，最近心身ともに衰弱し切っていた彼はベッドの上で死んでいた。

マボットは，この作品が，「貧乏」を主題としていること，そしてひとつのものが巡り巡って元の所有者のところへ戻って来ることを描いた短編小説"A Poet's Portmanteau" (1898) と多少類似していることを，ギッシングの作品であることの根拠として挙げている[19]。しかし，"Twenty Pounds"の場合，スティニングは死んでしまい，20ポンドの行き先はうやむやになることからして，作品の趣は異なっている。この作品が果たして実際ギッシングによって書かれたのか，やや疑問を感じる理由は，ヴィンセント・スターレットも指摘しているように，ギッシングらしからぬ，短く，簡潔で，歯切れの良い文章が使用されていることである[20]。

「貧乏」が主題になっているという点では"Joseph Yates' Temptation"も同じだが，この作品でも，やはりギッシングらしからぬ，短く，歯切れの良い文章が用いられており，彼によって書かれたものかどうかに疑問を感じるのであ

る。

ジョセフ・イェーツは，冷酷で，吝嗇家のピーター・ゲイル (Peter Gale) が経営する会社で働く帳簿係だった。ある日，ジョセフは取引先から受け取った100ポンドの小切手を記帳するのを忘れてしまった。その日，彼は給料の前払いを断られており，その100ポンドをポケットに入れたまま，沈んだ気持ちで帰宅していた。夕刊売りの少年に新聞を一部買って欲しいと頼まれたが，断り，ポケットの100ポンドを使い込みしようかという誘惑にかられていた。家に着くと，妻のベシー (Bessie) は，彼を暖かく迎え，子供たちに贈る休暇のプレゼントのことを話した。不正を働いて富を得るくらいなら貧乏の方がずっとましだと妻に言われた彼は，100ポンドを会社に戻すため，嵐の悪天候の中へ飛び出して行った。すると，再び例の夕刊売りの少年に出会った。彼の母が餓死しそうなのでどうしても金が必要だという話を聞いたジョセフは，ある家庭から10シリングを少年のために恵んでもらった。彼はその金で薪と食べ物を買い，少年の家へ行った。少年の母は，偶然にも，ジョセフの雇い主であるピーター・ゲイルのかつての妻で，彼と離婚してからこの少年，すなわちピーターとの間の子供，が生まれたという。この話を聞いたジョセフは，翌朝，会社に行って，使い込もうとした100ポンドのこととこの母子のことをピーターに話し，彼をふたりの住む家へ案内した。ジョセフは解雇されることを覚悟していたが，実際には，ピーターは彼に感謝し，彼の年俸を上げることを約束したうえに，謝礼として100ポンドを贈った。

この作品内容には，マボットも指摘するように，チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) 的要素が見られる[21]。ギッシングは，後にその人物伝を書くほど彼から多大な影響を受けており，彼を手本にしてこの作品を書いたということも考えられるが，ギッシングによって書かれたと容易に断定できる作品群に比較すると，この作品と“Twenty Pounds”は，彼の作品と断定するには根拠が薄弱であり，他の作家によって書かれた可能性もありうる。

Browne-Vargrave 3部作に対する疑問

最後に，ギッシングの作品と言い難いのが，ジョージ・エヴァレット・ヘイスティングスの発見した Browne-Vargrave 3部作である。

「Felix Browne」という作者名で書かれている最初の“The Death-Clock”は，ヴァーグレイヴ医師 (Dr. Vargrave) が，死後の世界にいる，かつて南海の島で愛しあった娘から呼び出しを受け，時計の針が真夜中の12時を打つと同時にこの世を去り，彼女の元へ行くという物語である。彼は，大学卒業後，仕事と遊びを兼ねてアンチル列島 (the Antilles) へ行くが，黄熱病にかかり，数週間，生死の間をさまよった。気がついてみたら，ヴァージニア (Virginia) という娘に看病されており，そのうちふたりは愛し合うようになった。ある日，彼は，恐ろしいヘビが彼女のひざの上で彼女の歌に合わせて踊り，頭を撫でられているのを見て，叫び声を上げ，そこへ飛び出して行った。すると，そのヘビは彼女の手を噛んで彼女を殺害した後，とぐろを巻いて姿を消した。ヴァーグレイヴは，悲しみのあまり，その島を去って，数年間外国を放浪した後，アメリカへ戻って来て開業医となった。そして，ヴァージニアの霊が彼を招き，彼女の形見である時計が夜の12時を打つと同時に，それに彫刻されていた2匹のヘビが実物となって出現し，ヴァーグレイヴ医師の手を噛んで彼を殺害した。

これに続く，「Dr. Vargave」のペンネームで書かれた“The Serpent-Charm”は，ヴァーグレイヴ医師の死後の世界でのヴァージニアとの再会と彼が現世に呼び戻されるまでを描いている。死後の世界でふたりは再会を果たし，ヴァージニアは，人間とヘビに交互に姿を変えながら彼に愛を告白した。しかし，彼女が，人間の姿で彼の胸に顔を埋めていた時，突然，ハトの羽ばたきがして，星が光り輝き，それと同時に彼女はヘビに姿を変え，苦痛と怒りで暗闇の中へ消えて行った。その直後に，「甘美と光明の幻」が出現し，「おまえの地球上での仕事はまだ終わっていない。おまえが生まれた世界はおまえを

ひどく必要としている」とヴァーグレイヴ医師に語りかける。そしてその幻は磁石のように彼を引き寄せ，地球上に引き戻す。すなわち彼は生き返ったのである。

次の“Dead and Alive”もやはり「Dr. Vargrave」のペンネームで書かれており，ブレック(Breck)という医師が，友人の医師シェイコフスキー (Shakovsky) とその妻に関する出来事をヴァーグレイヴ医師に語って聞かせる。シェイコフスキーは，ブレックと一緒にある大学の臨床講義から帰っている時，墓穴に棺が降ろされていて，その棺の中から恋人メアリー・マンロー(Mary Munroe) が苦痛と恐怖に顔をゆがめて彼の名前を呼んでいる幻が見えたとブレックに語った。ブレックは，ばかばかしい幻想だと笑い，シェイコフスキーの下宿に戻ったところ，メアリーが病死したという電報が彼女の郷里から届いていた。彼は，棺の中から彼の名前を呼ぶ彼女の幻想が頭から離れず，彼女の墓を掘ろうと決意する。彼はブレックとともに彼女の墓を掘るが，棺の中は空だった。その時，ふたりはメアリーのいとこと召使いに見つかり，墓荒しの容疑で逮捕される。それから6年たち，刑罰を終え医者として働いているブレックのもとへ，死の近い中年男性，つまりメアリーのかつての召使いが現れ，彼女に関する真相を語った。メアリーのいとこハワード(Howard)は，その放蕩のために父親から遺産を一銭ももらえず，メアリーが全額を相続することになった。ハワードは彼女に言い寄るが，無視されたために，召使いと共謀して彼女に睡眠薬を飲ませ死亡したように見せかけた。彼女の葬儀が終わってから，ふたりは彼女を墓から出して，秘密の部屋に閉じ込めた。そして，土をかぶせて元通りにした後，墓を掘るシェイコフスキーとブレックを発見し，捕まえたのである。かくしてハワードは父の遺産を手に入れ，召使いには，メアリーの生存を秘密にしておく限りは報酬を払い続けると言い残して，ヨーロッパへ旅立った。この召使いは，彼女の生存がばれることを恐れ，彼女を見つかる心配のない精神病院へ入れた。しかし，ハワードからの送金は徐々に途絶えてきたので，死に瀕した彼は，真相を告白することを決意したのである。ブレックからこの話を聞いたシェイコフスキーは，メアリーを救い出し，彼女と結婚した。

ヘイスティングスが，この3部作がギッシングの作品であると主張する根拠は，彼が敬愛したポー(Edgar Allan Poe)，シェリー(Percy Bysshe Shelly)，テニソン (Alfred Tennyson) の詩からの引用が同時に見られることと，記名作品である“Brownie”との類似である[22]。後に，ピエール・クスティヤス (Pierre Coustillas) が，“Brownie”の他にも，前述の“Cain and Abel”と“All for Love”がこの3部作と類似することを指摘し，ヘイスティングスの主張を援護している[23]。確かに，クスティヤスも言うように，これらの作品はすべて「現実と超自然の境界に位置している」[24]といえようが，Browne-Vargrave 3部作は現実を越えて超自然の側に位置しているのに対し，類似の3作は超自然に近いが現実の内側に位置しているという決定的な違いがある。

“Brownie”は，姉を殺害した叔父に妹が復讐をする物語である。確かに，この妹ブラウニーは，現実には存在しないような気味の悪い少女として描かれているが，この作品には，幽霊が現世の人間に語りかけるとか，彫刻物が実物となって現れるとか，死者が生き返るといった超自然現象はいっさい描かれていない。叔父が，「1年前，あなたは私を殺した。今夜，私は復讐する」という，ブラウニーの姉の署名入りの，木に彫られた文章を見て逃げ出し，川に飛び込んで溺死するという事件があるが，この文章は決して彼女が幽霊となって出現して彫ったものではない。復讐をたくらむブラウニーが彫ったということは，表現されてはいないが，明かである。

“Cain and Abel”は，主人公カインが，彼を虐待した叔父と兄アベルに対する復讐を誓い，アベルを殺害するが，彼自身，逮捕され，死刑を宣告されるという物語である。醜い顔の叔父が，自分と同じように醜い顔をしたアベルを異常なまでに溺愛し，ハンサムなカインを嫌悪し虐待する描写は確かに現実では考えられないほどで

あるが，この作品にも，死者の生還といった超自然現象はまったく描かれていない。

“All for Love”は，内科医ローレンス・ブルームフィールド（Lawrence Bloomfield）とその妻バーサ(Bertha)，そして彼女のかつての夫フィリップ・ヴァンストン（Philip Vanstone）の3人を巻き込んだ悲劇の物語である。バーサはフィリップと駆落ち結婚をしたが，彼の放蕩が原因で離婚し，この何年か後にローレンスに見初められ，過去を隠して彼と結婚した。今や悪名高い泥棒に身を持ち崩したフィリップは，ローレンスの家へ泥棒に入ることにより，バーサが彼と結婚していることを知り，彼女を脅迫し，金を巻き上げ続けた。やがてローレンスはこの事実を知ったが，それでもバーサを愛し続けるとフィリップに明言し，彼に金を与え，妻の過去を他人に言わぬことと，自分たちの前に二度と姿を現さぬことを誓わせた。しかし，1年後にフィリップは再び金をせびりに来て，精神的に参り切ったローレンスは彼を薬で気を失わせ，氷の張った運河へその体を沈めて殺害した。その後，ふとしたいたずら手紙から，ローレンスは，彼がフィリップを殺害したことを知っている人間がいると勘違いし，苦悩に耐え切れなくなり，同じ運河で入水自殺した。そして，夫の自殺を知ったバーサはショック死する。この3人の死は，周囲の人間には謎のままで，確かに，ミステリアスな作品の雰囲気という点では Browne-Vargrave 3部作と共通しているが，この作品にもまた死者の生還といった超自然現象はまったく描かれていない。

“Brownie”, “Cain and Abel”, “All for Love”を含めてギッシングのどの作品にも，現実では起こり得ない超自然現象はまったく描かれておらず，これが，Browne-Vargrave 3部作が彼以外の作家によって書かれたと思われる最大の根拠である。また，彼のアメリカ時代の作品の舞台には，必ずといっていいほどイギリスが登場してくるのに対し，この3部作の舞台はアメリカ，アンチル列島，そして死後の世界のみである。

この3部作の著者は彼でないと思われるもうひとつの大きな根拠は，ペンネームの不自然性である。彼のアメリカ時代の作品は，無記名，あるいは彼の本名と少しでも関わりのある G. R. G または G. R. Gresham というペンネームで書かれており，Felix Browne, Dr. Vargrave といった，彼の本名とはまったく関わりのない名前が登場してくるのは不自然である。

以上の考察から，ギッシングがアメリカ滞在中に書いたと言われている作品を，出版年月日順に，◎……彼によって書かれたと断定できるもの，○……断定はできないが，彼によって書かれた可能性の高いもの，△……彼以外の作家によって書かれた可能性もあるもの，×……彼以外の作家によって書かれた可能性の高いもの，と分類すれば，次ページの表の通りである。

	ペンネーム	作　品　名	掲載紙・出版年月日 (いずれも1877年)
◎	無記名	"The Sins of the Fathers"	*Chicago Tribune* 3月10日
○	無記名	"R. I. P"	*Chicago Tribune* 3月31日
◎	G. R. G.	"Too Dearly Bought"	*Chicago Tribune* 4月14日
×	Felix Browne	"The Death Clock"	*Chicago Tribune* 4月21日
◎	無記名	"Too Wretched to Live"	*Chicago Daily News* 4月24日
×	Dr. Vargrave	"The Serpent- Charm"	*Chicago Tribune* 4月28日
○	無記名	"The Warden's Daughter"	*Chicago Evening Journal* 4月28日
◎	G. R. Gresham	"A Terrible Mistake"	*National Weekly* 5月5日
◎	G. R. Gresham	"A Mother's Hope"	*Alliance* 5月12日
◎	G. R. G.	"Gretchen"	*Chiago Tribune* 5月12日
△	無記名	"Twenty Pounds"	*Chicago Evening Journal* 5月19日
△	無記名	"Joseph Yates' Temptation"	*Chicago Post* 6月2日
◎	G. R. Gresham	"A Test of Honor"	*Alliance* 6月2日
◎	無記名	"How They Cooked Me"	*Chicago Daily News* 6月4日
◎	無記名	"The Portrait"	*Chicago Daily News* 6月18日
◎	G. R. Gresham	"The Artist's Child"	*Alliance* 6月30日
◎	G. R. Gresham	"An English Coast-Picture"	*Appletons' Journal* 7月号
◎	無記名	"The Mysterious Portrait"	*Chicago Daily News* 7月6日
×	Dr. Vargave	"Dead and Alive"	*Chicago Tribune* 7月14日
◎	無記名	"One Farthing Damages"	*Chicago Post* 7月28日
◎	G. R. G.	"Brownie"	*Chicago Tribune* 7月29日
◎	無記名	"The Picture"	*Chicago Daily News* 8月4日

註

(1) *Letters of George Gissing to Members of His Family*, collected and arranged by Algernon & Ellen Gissing (London : Constable, 1927), pp. 16-17.

(2) *Ibid*., pp. 19-21.

(3) Robert L . Selig, "Gissing's Benefactor at the *Chicago Tribune*: An Identification from a Passage in *New Grub Street," Etudes Anglaises*, 38, No.4 (1985), pp. 434-441.

(4) *Letters of George Gissing to Members of His Family*, pp. 57-58.

(5) Morley Roberts, *The Private Life of Henry Maitland,* New and Revised Edition (London: Eveleigh Nash & Grayson, 1923), p. 38.

(6) George Gissing, *New Grub Street*, ed. Bernard Bergonzi (1891, rpt. Harmondsworth : Penguin, 1978), p. 429.

(7) *Letters of George Gissing to Members of His Family*, p. 58.

(8) Pierre Coustillas & Robert L. Selig,"Unknown Gissing Stories from Chicago,"*Times Literary Supplement*, December 12 1980, p. 1417.

(9) *George Gissing's Commonplace Book*, ed. Jacob Korg (New York : New York Public Library, 1962), p. 52.

(10) Robert L. Selig,"A Chicago Pretzel and a Gissing Feast,"*The Gissing Journal*, Vol. 27 No. 2, April 1991, pp. 14-15.

(11) Robert L. Selig,"An Unknown Gissing Story from the *Chicago Daily News*,"*Studies in Bibliography*, 36, (1983), pp. 207-208.

(12) 例えば，ファースト・ネームに関しては，*Workers in the Dawn* (1880) の Maud Gresham と *The Unclassed* (1884) の Maud Enderby, *Isabel Clarendon* (1886) の Ada Warren と *An Heiress on Condition* (1923, 死後出版) の Ada Wolstenholme, *New Grub Street* (1891) の Edmund Yule と *The Odd Wonen* (1893) の Edmund Widdowson など。ラスト・ネームに関しては，Cheeseman が，*A Life's Morning* (1888) と "My Clerical Rival"(1970, 死後出版) に出てくる。

(13) Robert L . Selig,"A Chicago Pretzel and a Gissing Feast," p.17.

(14) George Gissing,"How They Cooked Me,"*The Gissing Journal*, Vol. 27 No.2, April 1991, p. 23.

(15) Pierre Coustillas,"Introdution,"*George Gissing: Essays and Fiction* (Baltimore : The Johns Hopkins, 1970), p. 6

(16) Robert L . Selig,"A Further Gissing Attribution from the *Chicago Post*,"*The Papers of the Bibliograhical Society of America*, Vol. 80, lst quarter (1986), pp. 101-102.

(17) Thomas Ollive Mabbott,"Introduction Part Three," George Gissing, *Brownie With Six Other Stories Attributed to Him* (New York : Columbia Univ., 1931), pp. 16-21.

(18) Robert L . Selig,"An Unknown Gissing Story from the *Chicago Daily News*," pp. 206-207

(19) Mabbott,"Introduction Part Three," George Gissing, *Brownie with Six Other Stories Attributed to Him*, p . 17.

(20) Vincent Starrett ,"Introduction Part Two," *Ibid*., p. 15.

(21) Mabbott,"Introduction Part Three,"*Idid*., p. 18.

(22) George Everett Hastings,"Introduction Part One," *Idid*., pp. 10-11.

(23) Pierre Coustillas & Robert L . Selig,"Correspondence : Unconvincing Gissing Attributions,"*The Library*, 6 th ser., 9 September 1987, pp. 274-275.

(24) Ibid., p. 274.